特集

新学長に聞く

独立行政法人化をはじめとした、大学改革の渦中に六年ぶりに再登板した、平山郁夫新学長。インタビューと座談会によって、芸術教育にかける情熱と理念に迫る。

インタビュー

変革期の芸術教育

NHK「クローズアップ現代」のキャスターとして鋭い問題意識で知られる国谷裕子さんが人間・平山郁夫の〝本音〟を掘りさげる。

再登板への意気込み

国谷（裕子）　今回は二度目の学長就任となりますが、まさに大学改革の真っ只中ですよね。一九九五年に学長を退かれて、今回再登板を決意をされたのはどのような理由からでしょうか。

平山（郁夫）　急なお話ではあったのですが、これは大変な大学改革だと。一般の大学ならともかく、芸術関係の大学ですから。

私は旧制の最後の世代に属しています。旧制が六十年ぐらい、新制大学が六十年足らずで、約百十数年。今回の大学改革で新たに半世紀はもたせなければいけないんですね。恐らくこの二つを通過している人はいないと思うんですね。ですから、虚心坦懐で、私心がなく客観的に臨めるということが一つですね。

国立大学では、芸大しか文化を代表するところはないので、多少は自分を犠牲にしてもやむを得ないと。皆さんと協力して、ある時期、集中的にという覚悟をしましたね。覚悟したより、フッと出されたという感じでしょうね。

国谷　ワンポイントリリーフだとおっしゃっていますけれども、具体的にリリーフの期間はどれくらいだと考えていらっしゃいますか。

平山　大学改革のスケジュールから言いますと、平成十三年度末に新しい「国立大学法人」像についての最終報告が出されました。十四年度は、各大学が独自性を持って、決められた枠の中での「自主性」を討議する期間で、これが固まると、十五年度に法令化するわけです。十六年度から独立行政法人化に入るというスケジュールです。

国谷　そうすると、大体二年ぐらいですか。

平山　自立的に、自助努力でやるというところまでで

しょうね。

国谷　なぜ、平山さんに白羽の矢が立ったと、何を期待されてとご自分ではお考えですか。

平山　客観的な立場で、芸大を見られると思われたのでしょうか。私は、旧制の最後の幕引きをやって、そのまま新制大学の芸術大学の助手に残ったわけです。手さぐりで新しい大学制度になって、カリキュラムをはじめ、あらゆるものを試行錯誤しました。特に実技の科では先生方もわかりませんし、助手のいちばん若いのが、「君、何か考えろ」というんですね。もし、私がやるのなら、こういうふうにやればというふうに考えました。敗戦後の混乱の時代に再編成しようというのですから。そのときの経験も今度の新しい改革に生かせということではないかと思うんですけどね。

国谷　これからは今まで以上に、大学はトップダウンであるとか学長のリーダーシップが問われる時代と言われていますけれど、平山さんの指導力が期待されているということでしょうか。

平山　独立行政法人化で、私学になるのかといった不安感があるんですけど、国立大学であることには変わりはないですね。ただし、文部科学大臣から学長が任命を受けます。よりよい大学にするためにもっと成熟し、脱皮して、自立的にやりなさいと。教職員は非国家公務員となります。政府から交付金が出ますけれども、中期教育目的として独自の制度、あるいは研究・教育内容を出せば、さらに重点的に予算がおりますよと。ですから、研究、教育をやりながら大学を経営しなさいという面もあるわけですね。

　今まではいろいろな意味で制度疲労が来ています。これは大学だけじゃなく、政治も経済も、あらゆる部門が。二十一世紀は数合わせじゃなく、次の段階へ移る。時代の趨勢ですし、今までの経験をもとに先見性をもって、思想や理念をもって積極的に取り組んでいきたいと思います。

国谷　独自性や経営能力が大学に問われているというお話ですが、平山さんがあえて学長を引き受けられた背景には、相当の危機感も心の中ではおありになるのでないかと、感じたんですけれども。芸大として独自性を持ちながら、もしかして生き残れないかもしれないという、そういう思いはおありですか。

平山　人類の文化の歴史を見ますと、例えばルネッサンスが非常に優れた業績を残している。イタリアのメディチ家は、海外貿易や金融関係で、当時の進んだイスラム文化に啓発されて、これがルネッサンスの引き金になったわけです。しかし、政治的環境からすれば、権謀術数で、大変な時代でした。

　ミケランジェロがシスティーナ礼拝堂の「最後の審判」を描いたとき、法王がお金を払ってくれないので、馬に乗って戦場まで追いかけていって、報酬を認めさせた。激しい変化がある時代で、だから名作も生まれた。時代が移行するエネルギーがあったわけです。

　二十一世紀の日本はいかにあるべきか、転換期をエネルギーとしてとらえて、みずから次の世界へ移行するんだという意識や責任感が必要でしょう。

再編・統合の時代に

国谷　大学の再編や統合の動きが活発になっていますけれども、芸大として、よりよい教育、よりよい創造、感性を育てる教育を行うために、具体的な連携とか、あるいは統合とか再編を考えていらっしゃいますか。もし考えていらっしゃるとすれば、どこの大学が具体的なパートナーとして適切だと思っていらっしゃいますか。

平山　芸術系の創造を特化する大学は、芸大のほかにないんです。大学によっては芸術的な要素を必要とするところはたくさんあるわけです。しかし、芸術大学の教育は質が違うものですから。教養的なものや基礎研究は大変必要なんですね

　ただ今日必要とされるのは、国際的に大学の質を高めなさいということでしょう。今までは追いつけ追い越せでしたけど、芸術大学として世界に伍してとなると、一般教養とは異なるさまざまな勉強もしなければいけません。

国谷　芸大のすぐ近くには東大という大変立派な国立大学があります。感性を磨くためには幅広い教養も必要ですし、いつも平山さんがおっしゃっているアイディンティティのある学生たちを育むためには、歴史や文化も知らなければいけない。東大という、教育の場としては優れた国立大学がある中で、具体的に一緒に協力してもおかしくないと、外から見えるのですけれども。

平山　我々の時代でも、旧制の第一高等学校や東大から、国文学や美術史など、当時の東京美術学校にないものを客員教授で来ていただいて集中講義を受けたり、また向こう側にないものは美術学校の教授が教えに行くことはありました。ただ同じ歴史、教養と言っても質が違うんですね。「一」プラス「一」が「二」にならないんですね。我々のほうは「一」プラス「一」は「五」や「六」に持っていこうというわけですから。博識で辞書みたいに物事を知っていることと、自分の新しい解釈で理論立てをするというのは違うんですね。自分の学問や芸術に対する理念、哲学というものをしっかり持つということが個性なんですね。

　ものを生み出す、クリエイトと言うのは、思想、哲学なんです。学問的に細かく分析して実証するという学問の分野と、これを読んで美的な創造をするというのは、ちょっと質が違うんですね。

国谷　一方で学生たちを見てみると、平山先生は今の学生たちは自由の中の不自由だと。自由があるがために、自分で何をやりたいか、自分が何のために描くかという、強い思いを持って創作活動に当たっていな

いのではないかとおっしゃっていますね。

平山　これは時代の宿命といいますか。私は戦争中に育って、不自由な中で、それで自由を見出しました。自分が座ったところに何かを見つける。環境や条件を理由にするようだと、一生だめなんですね。

私は、インドや中国の街中では、季節も問わず、絵を描き出す。どこでも座ったところがアトリエだという訓練や修行をしてきました。スポーツ選手を例にとっても、オリンピックの何万という観衆の中で、瞬間の勝負に挑む。限られた状況の中で大変な集中力と訓練が要るわけですね。

国谷　自分の中の思想を持つということとかそういうのを具体的に学校の中でどうやって教えていくんでしょうか。

平山　人類はどういうふうにして文化や文明を起こしてきたのか、その原理原則を勉強したり、文学や音楽でも一流に接することでしょうね。

私が美術学校に入ったとき、戦争が終わるまで教授をやっていた第二回卒業生のおじがいたんです。美校には、おじに乗せられて入ったのですが、途中でしまったと思いましてね。才能がないので二回くらい、やめようと思ったんですが、どうせなら文学部に入って美術史を学ぼうと、一生懸命勉強したことがあとで役に立ちました。自分で苦労しながら、どういう状況でも何かを見つけていくというんじゃないかと思いますね。

平山郁夫
ひらやま・いくお

1930年広島県生まれ。
52年東京美術学校卒業。73年東京芸術大学美術学部教授、88年美術学部長を経て、89年学長に就任。95年任期満了により学長を退官。2001年東京芸術大学学長に再就任。財団法人文化財保護振興財団理事長、ユネスコ親善大使など公職多数。
1998年に文化勲章受章。

技術や感性、あるいは生き方、生きざまの面で自分の「型」を持っているいい先生や友達や先輩がいますと、彼らの背中を見ますので、私の場合、いい人に巡り会ってということがありますね。美校をやめたいと思ったときに、すばらしい先生に出会って「だれでも一度は落ちていくんです。着地したのだから、これより下がることはない。浮上するから、気を楽にしてやり直してみなさい」と言われたんです。だれでも、一度は挫折しますしね。二回も挫折したら、平気になってちょっとやそっとではつぶれなくなりますから。自覚するのは早いほどいいなと思ったことがあります。

国谷　技術面では、ある程度長く教えていれば向上するかと思うんですけれども、芸術家に必要な感性やオリジナリティの創造ということを、学校という環境で教えることの難しさを、改めてひしひしと感じますけれども。

平山　既成の知識や技術は教えられるのですよ。そこにとどまっているとコピーだけになります。そこから脱したときに生まれる応用問題がオリジナルなんです。応用問題の答えは、だれも教えてくれませんから。

そのときに何を足がかりにするかというと、自分で一生懸命培ってきた教養や基礎をもとに、少しずつでも高い目標を掲げていけば、視野が広がってくるわけです。点が線になって、理想が高いほど一生かけてもやりおおせない座標が出てくる。簡単には到達しませんが、座標は狂いません。目標や理念があると、何度でもそこへ挑みかかっていく。その無駄なものが幅になり、蓄積されて、プラスになる。表に出るのは氷山の一角のわずかな部分なのです。それはやってないと出てこないですね。

教官の役割、教官への評価

国谷　一人ひとりの学生としての体験と、その人の持っている才能の融合が必要なのですね。

これからは国立大学も実績を求められていくということで、本当に結果を出していかないと、第三者機関によって評価されるという仕組みにもなってまいります。そうした中で、先生の考えを伺いますと、教官の方々の任用システムをいかにしてつくっていくか、そうした指導ができる先生方、あるいは学校の効率的な運営もおこなっていくことも考えなければいけないなど、さまざまなことが求められています。その中で、改革の根幹とおっしゃる教官の方々の役割分担は、どのようにしていくのでしょうか。

平山　旧制美術学校時代は、よい研究教育には優れた教官が不可欠だと言われていました。我々の時代、トップの先生は、長くいてくださいと言っても、ご自分の創作活動がありますし、非常に難しかったと思うんです。ですから、大体一〇年ワンサイクルで、ご自分の教えが一応完結すると辞意を表明するわけですね。自分の主張、教育理念は終わったから、次の先生にお渡ししますと、また次の時代に育った一流の先生が入ってくる。ですから、新しい空気を絶えず入れていて緊張感がありました。

国谷　最近はどうですか。

平山　常勤の教官が国家公務員、終身雇用ということで、助手は年限を設けているところもありますけど、講師以上となると、定年までずっとおられるという制度になり、ご自分で辞意を表明されない。優秀な教官を選抜するんですけど、中にはさらによくなる人もいれば、少し安心してゆっくり歩く人もいるわけですね。

いい研究をやるには刺激しなければいけないので、十年ぐらいで任期制を導入しようと。その前に点検評価があるんですが、普通は制度がなくても自主的にやらなければいけないんですよ。私の場合、卒業以来五十年間、グループ展や個展で、年じゅう作品を発表しています。独立したらいつもタイトルマッチをやって

国谷裕子
くにや・ひろこ

大阪府生まれ。ブラウン大学（アメリカ）卒業。国際関係及び国際経済専攻。
1993年よりNHK総合テレビ「クローズアップ現代」キャスター。
94年に橋田須賀子賞、96年に放送文化基金賞を受賞。

いるわけです。必死になって生き残らなければ生活ができないんですよ。一度獲得した地位なんていうのは仮のもので、最後に残るのは実力なわけですね。

随時作品を発表している先生もおりますけれど、発表する機会がない、場が少ない分野もありますね。幸い、大学美術館や奏楽堂をつくってもらいまして、そこで教官の発表を五年おきぐらいにやって、内外の評価を受ける。皆さん力を持っていますから、立派な業績を上げると思います。そこをクリアしてご本人がずっと研究教育をやりたいと言えば定年までいられますし、残念ながらもうちょっと勉強してくださいという人は自分で道を確保することになる。そういうことが教官自身の勉強にもなり、学生にも刺激を与えますしね。

国谷　教官の中にも緊張感を高めていくということですね。世の中、能力主義や実力主義と言われていますけれども、終身雇用の中の、いわゆるおっとりとした雰囲気は変えていきたいと思われているわけですね。

平山　競争原理というのか、作品を発表しながらだんだんに成長していくというのは制度とは関係ないんです。本来なら、芸術家として研究者として、当然の義務なんです。ですから、客観的に見えにくいという分野もありますけど、今までやっていないということは、怠っているということですね。

国谷　教官が皆さん一流の芸術家で、作品がすばらしい方々ばかりでも教育者としては困るんじゃないですか

平山　そうですね。それは役割分担があります。

国谷　大学の経営能力を持っていらっしゃる方とかも必要でしょう。

平山　研究は飛び抜けていなくても、教育が非常にうまいという先生もおられます。人間的に非常に立派で、親切で面倒見がいい。基礎をしっかりとたたき込んで、非常に気配りがあるタイプですね。「鬼軍曹」という言葉がありますが、初年兵に訓練を叩き込む役割の教官も必要なわけです。教育に優れた人、研究に優れた人、チェック機関がそれを選別して、不公平感がないように持っていかなければいけないと思いますね。

国谷　役割を明確化しながら、それぞれの物差しで優れた方々を残していくというやり方ですね。

平山　すべてを同じ尺度で評価すると、逆に総合的にはなりませんのでね。

今回はさまざまな制度を支えるのに、事務職員の方が大変だと思います。独立行政法人化に関する問題を、我々は精神的に表現しますけど、それを第三者が読んでもわかるような文言に置き換えていただくのですから。「一」プラス「一」は「四」だなんて言ったら、数学では落第しますけど、そういうことをわかりやすく説明して書いていただかなければいけないわけですね。

国谷　第三者機関の評価というのが導入されて、その評価によって交付金も変わってくる。効率性がすべての面で問われるわけですけれども、とりわけ芸術大学としての業績・実績に対する評価は、第三者にわかるものなんでしょうか。

平山　評価の基準について教官の方々も心配していますけど、これはすぐ数字にはでてきませんね。このあいだ、東京国立博物館で横山大観の展覧会をやりましたら、一カ月で二十八万人の入場者があった。大観先生は美術学校の第一回目の卒業生です。二回目が菱田春草で、音楽には山田耕筰先生がいるなど、大変な芸術家を輩出してきたわけです。

科学技術的な先端技術などの場合、発明されたときが一番のピークで、だんだん古くなりますね。ところが、横山大観先生は、この間も展覧会中にオークションをやりましたら、不景気にもかかわらず大変な高値で落札されたんですよ。そういうふうに見ますと、すぐには数字には出ませんけど、付加価値というのがあります。何年かに一回、優れた芸術家が出ると、その総財産というのは大変なものだと思うんです。

フランスのド・ゴール大統領がアルジェリアの独立問題のとき、私はちょうどユネスコ・フェローで留学中だったんです。ド・ゴールは軍人出身の大統領だったんですが、アルジェリアの植民地を維持するのに何個師団必要で、毎日いくらかかるんだと苦慮したんです。その結果、民族自決主義で独立するんだから、人権を尊ぶフランスは認めるべきだというので、撤退という命令を下した。何万人の軍隊を出して、お金をかけて恨まれるより、我々には文化という鉱脈がある。フランスのパリには、セザンヌ、ルノアール、マネがある。たとえば、セザンヌの価値を金銭で換算したら、桁外れなんですね。だから、一人でも立派な芸術家が出れば戦争を続ける意味はないと悟ったんです。そこで文化を育てて国際貢献する道を選んだのです。

芸術大学の美術館にある立派な創造作品を公開したり、あるいは教官が作品展示をしたり、あるいは奏楽堂で音楽の先生たちが演奏することで、少しでも社会に還元したい。時間はかかりますけど、そういう中から優れた卒業生が将来育ったときに、いい作曲が生まれ、いい作品が生まれ、何百年も伝わっていくわけですね。長い目で見ていただきたいと思います。

国谷　ほかの大学ですと、技術開発がベンチャー企業につながり、新しい産業創造にも結びつくというわか

りやすい形で大学の業績が出てくるかと思うんですけれども、芸大の場合は時間をかけて見てほしいということでしょうか。

平山　ええ。文化、芸術というのは、国の品格なんですね。日本の古い文化遺産が、ヨーロッパ各国やアメリカの美術館にたくさん収められ、大事にされています。浮世絵にしても、海を渡るとき「包み紙」で行ったものが、今や何十万ドル、何百万ドルというふうな高価になっているわけですね。これは日本の国有のものだ、それを育てているんだという気持ちでお願いしたいと思っています。

国際交流のあり方

国谷　大学として国際交流にあえて力を入れることで、どういうメリットがあるというふうに思われますか。

平山　この二月にもフランス、アメリカに行って、パリのエコール・ド・ボザールやギメ国立東洋美術館、アメリカではスミソニアンのフリア美術館などと、交流について話をしてきました。

二十一世紀の新しい芸術創造といっても、それぞれの国がアイディンティティを持って変革しているわけですね。我々の場合でしたら、飛鳥、天平からの千数百年の歴史がある。その背後には朝鮮半島や中国やインド、東半球のアジアの歴史があります。ヨーロッパはギリシア、ローマ以来の歴史を背負っています。交流することによって、我々は日本のアジアの特質を、しっかり自覚するようになると思うんですね。

国谷　国際舞台に出ていけば出ていくほど自覚されることがある。

平山　EUが一つになることで、スペインやオランダのような小さな国の個性がなくなるのかというと、かえって成熟してくると思うんです。自分たちのものをしっかり持って発言し、お互いに交流するわけですね。

国谷　岡倉天心以来の日本美術の近代化をしたいとおっしゃっていますけれども、日本美術はまだまだ世界レベルでは勝負できていない、というふうに思っていらっしゃいますか。

平山　日本人は非常にシャイなんですね。原理は中国から導入しても、日本人の感性で、優れたものをつくっているわけですが、外で見せびらかすような性格じゃなかったんですね。外国人が評価して初めて自覚する。それなのに、外国の二番手ぐらいに喜ぶ場合もある。極端なんですね。無国籍になったんでは絶対に尊敬されませんね。

国谷　誇りを持ってほしいということですか。

平山　日本人は日本人としての矜持を持って欲しいですね。控えめで、少し内気ですが、つき合いを深めるとわかってもらえますしね。

例えば俳句なり和歌でも、枕詞に密度の高いものがインプットされています。風土も含めて、曖昧ではなくて寛容なんですね。一神教の合理主義の国の価値観もあれば、日本のように寛容な、共存共生しましょうという価値観もある。お互いを理解した上で、交流できれば非常にすばらしいんじゃないかと思うんですね。

世界遺産の保存と創作活動

国谷　平山さんといえば、世界の遺産の保護・保存にも力を入れていらっしゃいますけど、今、大きな問題になっているバーミヤンの破壊された仏像ですが、先日、イランの映画監督のマフマルバフ監督にインタビューする機会があったんです。監督はバーミヤンの破壊された仏像はあのままにしておいたほうがいいのではないかとおっしゃったんですね。これは世界がアフガニスタンを見捨てた歴史的な恥の象徴として、そのままの形で私たちの記憶に残しておくべきではないかというふうにおっしゃっていたんですね。平山さんのお考えはいかがでしょうか。

平山　私も、修復、再現には反対なんです。いろいろな意見があるようですね。三百万に近い難民が家を失い、イランあるいはパキスタンで路頭に迷い、食べるものもなく、教育ができないというのに、なぜコピーをつくるのかと率直に思います。そういうお金があれば、まず人を救うべきだということで、私は、反対を早くから表明しています。ブラフミさんという国連代表から、先週カンダハルから電話がかかりまして、五月にカブールで国際会議を開催するので、ぜひ出席してくださいという要請が来ました。

国谷　そうしますと、あのままで残そうというお考えでしょうか？

平山　私は二十世紀の負の遺産が人道的にアウシュビッツ、核の廃絶という問題では広島の原爆ドームだと考えています。原爆ドームのユネスコ世界遺産登録のときに一生懸命動いたんですけど、同じようにバーミヤンは二十一世紀初頭の文化の破壊で、これをそのまま残したほうがいいと言っています。破壊されたままの状態で世界遺産に指定するべきだということを早くから提言しているんです。

国谷　最後に、学長としての務めもおありでしょうが、やはり芸術家として創作活動に全力で打ち込んでいらっしゃりたかったのではないかと思うんですけど、これからはどのような作品に取り組んでいかれますか。

平山　今でも会議があっても、帰って筆をとらない日はないですね。

飛鳥、天平時代は随分描きましたので、今度は平成をテーマに「平成の洛中洛外」という題で構想しています。時間があると京都へ取材に行っておりまして、三、四年後に、新作だけの大きい個展をやりたいと思っています。

国谷　では、創作活動のほうも引き続き活発に続けていかれるわけですね。

平山　ええ。これからの十年が私の最後の仕上げだと思っているんです。

（四月十八日、セルリアンタワー東急ホテル「紅葉」の間）